

岐阜県のため池における外来魚駆除：池ごとの比較

向井貴彦（岐阜大学地域科学部）・三輪芳明・塚原幸治（岐阜・美濃生態系研究会）

岐阜県的美濃市と関市には絶滅危惧種であるウシモツゴの生息地が残されており，官民協働で生息地の保護と，系統保存，ため池の外来魚駆除による生息地の復元をおこなっている．演者らは，その過程でおこなわれた池干しによる外来魚駆除に参加し，採集された魚種と個体数等についてのデータを集めてきたので紹介したい．

<池干しの効果>

8 地点 14 回の池干しをおこない，5 地点でオオクチバスとブルーギルが根絶できた．そのうちの 3 地点は最初の池干し翌年以降に再度オオクチバスが確認されたが，再度池干し駆除をおこなった上で，ウシモツゴの復元生息地としてのマスコミ報道や復元生息地であることを示す立て看板の設置などをした結果，それ以後のオオクチバスの出現が無くなった．残りの 2 地点は，池干し後すぐにウシモツゴの復元生息地としたところ，1 地点にはオオクチバスもブルーギルも侵入せず，もう 1 地点は翌年の夏に大量のフナ類とブルーギルが突如出現したがオオクチバスは侵入しなかった．ウシモツゴの復元生息地として周知しなかった 3 地点のうち 2 地点には再度のオオクチバスの侵入があった(1 地点は現状不明)．これらのことから，池干しの駆除効果は高く，水抜きが充分できる池なら 1 回で外来魚の根絶が可能だが，希少魚保護池としてのアピールなどがなければ，すぐに違法放流がおこなわれることを示している．

<オオクチバスの体長組成>

池干しでオオクチバスが捕獲されたのは 8 地点 13 回あった．データの得られた 9 回の体長組成を比較すると，(1) SL25～37cm の成魚のみの成魚単峰型 (n=1，池干し駆除翌年)，(2) 当歳魚と思われる SL12cm 以下の個体が全個体数の 70～90% を占める若魚単峰型 (n=2，1 例は池干しの 2 年後，1 例は侵入年不明)，(3) SL30cm 以上，20cm 前後，15cm 以下といった複数のピークが明瞭な多峰型 (n=6，いずれも侵入年不明) に分けることができた．これらの違いは，少数個体が放流された後の経過年数を反映していると考えられた．

<「中池」の事例>

関市中池は有名バス釣り場であったが，2009 年に池の水質浄化を目的とした池干しが行われ，その後も 2010 年と 2011 年にも続けて池干しが行われた．しかし，毎年池干しにも関わらず，ヘラブナは 2010 年に約 1 万尾 (約 800kg)，2011 年に約 7 万尾 (約 2t) が捕獲され，オオクチバスの捕獲個体数も 1000 個体前後でほとんど変化しなかった．しかし，コイとブルーギルは激減しており，ヘラブナとオオクチバスが全く減少しないのは，2 年連続で意図的に放流されたことを示している．このことは外来生物法によってオオクチバスの生体の売買ができないにもかかわらず 1000 尾規模の違法放流が可能であることを示している．